

グランドゼロ

GROUND
ZERO JCF

87 春

2011年4月26日発行

- 福島原発事故被災者に緊急支援
 - イラク支援
- 第10回 J I M—NET 会議



「日本の皆さんのために祈っています!」「皆さんにはこの危機を乗り越える強さがある」 イラクの子ども達からの応援メッセージ



JCF

ベトカからお見舞い

モスクワのイリーナさんから、メールが届きました。

今どうしていますか？日本で起こっていることは信じがたい。チェルノブイリ事故に似ています。気をつけてくださいね！

ベトカのナジェージダ院長からのお手紙です。

『親愛なる 皆さま

ベトカ中央病院の職員は悲劇の渦中にある皆さまとすべての日本国民の皆さまに、お見舞い申し上げます。日本の皆さまの英知と思ひやりが、悲劇に打ち勝ち、生活の再建に向かうことを願っています。

ナジェージダ・ジミナ 』

頑張ってくださいね。

イリーナ・N

Уважаемые Друзья

Учреждение здравоохранения "Ветковская центральная районная больница выражает глубокое соболезнование Вами в Вашем лице всему японскому народу в связи с трагическими событиями в Вашей стране. Надеемся, что мудрость и душевная стойкость, присущая японскому народу помогут Вам преодолеть последствия трагедии и возвратиться к созидательной жизни

Надежда Зими́на

グランドゼロ 87 春

GROUND ZERO JCF

目次

| | | |
|------------------------------------------|--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|----------------------------------------------------------------|
| チェルノブイリから 25 年 福島原発事故被災者への 緊急支援始まる | 未曾有の天災、原発震災に 大惨事の地、南相馬への支援 原発震災に寄せて 原発震災に直面している皆さま そしてすべての皆さまへ 「福島原発震災の被災者支援募金」のお願い | 6 11 14 17 |
| 第 10 回 J I M - N E T 会議 2011 年度支援内容確認 | J C F 設立 20 年を迎えて チェルノブイリ事故 25 周年によせて チェルノブイリからのいただき物 2010 年度治療データ発表と次年度の支援項目の確認 新しいイラクに変わる | < 鎌田 實 > 18 < 高村 昇 > 21 < 力丸邦子 > 24 28 < 加藤文典 > 30 |
| 映画 『ミツバチの羽音と地球の回転』 | ミツバチ松本上映 そして羽ばたくミツバチたち 『ミツバチの羽音と地球の回転』を観て | < 平島安人 > 32 < 有賀敬子 > 37 |
| 連載 & お知らせ | 連載随筆「摂理の時」 ベラルーシの食卓 モスクワ便り 振替用紙のメッセージから ありがとうございました！ Здравствуйте！（事務局広場） カルチャーレビュー インフォメーション | < 宮尾 彰 > 40 42 43 44 46 52 56 58 |

表紙は Dr. マーゼンから届いたバグダード小児福祉教育病院の子ども達からの応援メッセージの写真です。

チェルノブイリから 25 年

福島原発事故被災者への緊急支援始まる



南相馬の避難所（原第一小学校）で診察する諏訪中央病院医師

地震で家が崩壊した。身内が津波で亡くなった。原発震災で、避難しなければならない。南相馬市の避難所には、先行きの見えない不安を抱えながら、過ごす人たちがいる。眠れない。便秘になった。風邪をひいても、薬が無い。

諏訪中央病院の医療チームと JCF は、食料・生活支援品・薬を持って、福島県南相馬市に向かった。

未曾有の天災、原発震災に

大惨事の地、南相馬への支援

神谷さだ子（JCF事務局長）



津波が押し寄せ、漁船や車が汚泥の中に埋もれていた（南相馬市）

3月11日、午後2時46分、マグニチュード9.0の大地震が、東北関東沖で起こり、未曾有の大津波が岩手・宮城・福島・茨城・関東地方の海岸に押し寄せた。5m以上の大波が、漁船や車、家々を飲み込んでいく様がTVに映し出されると、体全体が恐怖に捉われる。翌12日、夕方、モスクワから電話が入った。タチヤーナ・ブジリーナ（ターニャ）からだった。

「神谷さん、大丈夫ですか？ JCFの皆さんは大丈夫？」

彼女は話すのは、5年ぶりだった。実は、朝から福島第一原発で大気中に

通常の10000倍の放射性物質が検出された、というニュースを見たときから、とんでもない事が起きてしまったと心休まる時がなかった。ターニャはベラルーシ、ゴメリ、チェルヌブクの保健局の放射能測定士だった。チェルノブイリの事故では原発から200キロ近く離れた地でも、大気に拡散した放射性物質が風に運ばれ、フォールアウトし、原発近くのゾーンと同じ位汚染された。彼女は、「たんぼぼ」という測定器で土壌の定点観測をし、食べ物汚染調査を続けた。「私たちに、チェルノブイリの事故は初めての経験だった。何をどうしたらいいかわからなかった。そこへ広島・長崎を経験した日本人が、支援に来てくれた」と言っ、JCFと協力して、子ども達の検診を手伝ってくれた。

そのターニャが、モスクワでニュースを見て、心配の電話をくれたのだ。なんだか情けなく、切なかった。

その後の、炉心溶融、水素ガス爆発、ピットからの放射性物質の海水への漏れなど、東京電力では、原子炉の破損状態が把握できずに、応急処置で辻褄あわせをしているだけではないかと思えてくる。

大気中の汚染度が発表され「これは、人体に影響を与える数値ではありません」と繰り返す記者会見には、辟易した。

誰も低線量内部被曝について、知識が無いのだろうか。わずかな線量でも、皮膚や経口から被曝し、DNAを損傷する危惧がある。特に乳幼児や児童はリスクが高い。これから妊娠する可能性のある40才以下の女性たちは特に気をつけたい。

そして、懸念していた風評被害も広がっている。汚染地域の露地物野菜は、気をつけたいと呼びかけていたが、離れた群馬県産の野菜、風向きによって、汚染がひどくない地域の野菜も市場に

出荷することができない。

地震・津波によって生活を切断された、たくさんの人々がいる。暗澹とした気持ちは拭いようも無く、重なる原発震災の報道に押しつぶされそうになっていた。

14日、鎌田理事長と縁故のある、福島県南相馬市の市立病院から「液体酸素が底をついてきた、酸素吸入している患者が大変な事になる」と連絡が入った。南相馬市は、原発から23キロ地点。20キロから30キロの自主避難区域と括られたために、外から医薬品のみならず、食料品、ガソリンが入ってこなくなつた。救援ボランティアさえも、入れない。桜井市長が悲痛な声を上げていた。汚染度は比較的低い地域なのに、同心円で括られたために、住民は戸惑い、生活に支障が出ている。

私たちは、怖気づくことが無かった。それをチエルノブイリの経験と一言で言ってしまうのは、悲しい。でも、地獄から消された埋葬の村に住み続ける友人達が何人もいる。汚染の高い地域で、住民のためにがんばるといふベトカ地区病院長とも繋がっている。南相馬市の方々を応援するために、できる限りのことをしようと思った。



支援物資や医薬品等を積み込むとトラックの荷台は満載

第一次派遣団は、21日0時、トイレッ
トペーパー・紙おむつ・レトルト食品・
雨合羽などを4トン車に積み、諏訪中
央病院の医師・看護師たちと南相馬市
立総合病院に向かった。

1時間ごとに簡易測定器で、線量を
チェックしていった。高速を降りて、



簡易測定器で放射線量のチェック

飯館付近の道路に差し掛かった時、9
99マイクロシーベルトが上限の測定器
が振り切れた。そこは、30キロ圏外に
なる。事故の早い時期に、風に乗った
放射性物質が、この地まで運ばれてき
たのだ。

南相馬市立総合病院に朝8時に到着
した。177人の入院患者を全員県外
に搬送し終わった直後だった。病院の
医師や看護師たちも大勢避難してい
て、残ったスタッフが不眠不休で働い
ていた。

諏訪中央病院医療チームは、すばや
く支援物資をおろすと引継ぎミーティ
ングを済ませ、外来に入った。市内で
唯一、薬を処方する窓口が開いた。私
は、殺到する方々の受付を手伝った。
普段は他の病院に通っている方も、保
険証を持たない方も、お薬手帳を基に、
1週間分の薬が処方されていた。「1
週間後に、この病院はやっているんで



南相馬市立総合病院で検査をする諏訪中央病院看護師

すか？」と聞かれ答えに窮した。事務
長さんに聞くと「わかりません」と。
薬を待つ方々の声が耳に入ってきた。
「県外に避難したいが、動けないお年
寄りがいる」「ここで薬をもらったら、
その足で、東京に向かうつもりだ」「義
理の父母が見つかり、2日後に火葬が
決まった。いま、離れるわけにはいか



病院の入り口では放射線量測定が行われる

ない」等など、動くに動けない人、行く先での不安を訴える人が大勢いた。午後からは、南相馬市立小高病院の遠藤先生に案内され、避難所の健康診断を行った。

小高病院は、原発から15キロあまりのところにあつた。津波に襲われ、患

者を急遽、南相馬市立総合病院に移したそうだった。小高病院スタッフも、家を失った方、身内を亡くされた方、暮らしが根こそぎ断ち切られてしまった方たちだ。遠藤先生が、山形や猪苗代の病院で働けるよう手配されたが、今後の生活を立て直すのにも、時間がかかるに違いない。胸が痛む。

第一小学校、鹿島中学校の体育館が避難所になっており、それぞれに70人が、毛布に包まっていた。小高地区から避難されているお年寄り達が、遠藤先生の顔を見ると安心された様子で、寄って来られた。

諏訪中央病院医療チームの佐藤先生と原先生は、交代で避難所の検診と当直も行なった。佐藤先生は、自分達のミツシヨンは、南相馬の先生達に休んでいた、だくこと。そして、ずっと居られる訳ではないので、きちんと引継ぎできるように、カルテを整えていくことなどを明言された。休み無く働く姿に

感謝すると、「普段の仕事より楽ですよ」と笑っていらっしやうた。宮澤看護師とは10年前にチェルノブイリに同行した。今回もていねいに避難所に居る方々に声をかけながら血圧と体温を計っていた。頼もしい限りの医療チームだ。

午前中は、病院外来、午後は避難所検診。それが3回まわった頃、鎌田理事長と諏訪中央病院の医師・看護師、事務局スタッフ等5名の第二陣が松本を出発した。鎌田理事長は、避難所の方達を励ましたいとレトルトおでんを運んでくれた。毎回の食事は、冷たいおにぎりや菓子パン。2週間続くと喉に通らなくなる、という声にこえたものだった。

避難所に温かい食事をと、看護師さん達と皆で、給食室を使ってご飯を炊いたり、準備をした。

避難所では、皆さん大喜び。実際、



避難所の方に喜ばれた温かいおでん

私達もこんなに喜んでいただけるとは思わなかった。何よりも、温かい汁物、おでんの残り汁にご飯を入れて、卵おじやも作った。冷え切った避難所が、一気に温かくなった。鎌田先生も、一人ひとりに声をかけていった。空っぽになった大なべを抱えて、帰ろうとすると皆さんから拍手が起こった。

ところが、25日朝、TVで枝野官房長官が、20〜30キロ圏内を自主避難指示の方向で考えている、という談話が流れた。「自主避難指示」とはなんとあいまいな表現だろう。避難命令ではない。自主というからには、個人の判断にゆだねるということだ。事故当初から、政府・東電・保安院の発表はあいまいでいい加減だ。

更に、SPEEDI（スピーディ）という政府の環境放射線量の予測システムでも、大気中の線量が上がっている。夜のミーティングでは、緊迫した空気が流れた。諏訪中央病院の吉岡先生、福永看護師は、来たばかりだ。仕事をしないで帰るなんてできないと訴えた。

鎌田先生が、一人ひとり意見を聞いていった。公的立場と個人的な気持ちの葛藤がそれぞれにあった。そして、佐藤先生がこう言われた。自分達は南相馬病院の医師達をサポートする立場

で活動した。病院には、スタッフも戻りだしている。4人だった医師が8人になって、外来スタッフも足りてきている。期限を決め、引き継ぐための記録も作ってある。ここは、ひとまず引き上げよう、と。苦渋の決断だった。全員、松本・茅野に戻ることにした。

第一次・第二次派遣団のおおよその動きは、以上である。

今、第三次派遣の準備が終わった。事態は時々刻々と変化し、対応が難しい。一時、県外に避難していた人が、また、南相馬の避難所に戻ってきているという。

第三次は、避難所の健康診断に加えて、豚汁の炊き出し、そして、長野県への避難ルートを作るための調査をしたいと思っている。



原発震災に寄せて

加藤 丈典（JCF事務局）

「お前のところは地震の被害はなかったか？ 日本のスタッフ達は大丈夫か？」という電話が私にとつての東北大震災の第一報だった。イラクのナナカリ病院のオマル行政部長からだった。電話の声がかなり慌てた様子だったので、直ちにテレビでニュースを手エックした。とんでもない映像を目の当たりにした。信じられなかった。そしてさらに福島第一原発の事故が追い打ちをかけた。これが本当に日本で起こっていることなのだろうか。原発事故のニュースはあまりに衝撃的だった。

JCFはこの原発震災を受けて、被災地の南相馬市に緊急医療支援、食糧

支援を開始した。私は第二次支援隊に加わり、諏訪中央病院の吉岡先生、福永看護師、そしてドライバーの太田さん、鎌田理事長らと共に3月25日現地へ向かった。

いまが非常事態であるということ現場が近づくにつれて実感した。高速道路は自衛隊や救急車など長く続く救援車両の列がものものしい雰囲気を出していた。南相馬市の手前、川俣町に入りだした頃から雪も降り出した。大気中に飛散した放射能が地面に降り注ぐのではと心配になった。地震、原発事故に加えて、寒さが事態を一層厳しいものにしていった。

南相馬市立総合病院で第一次支援隊と合流、その後津波の被害が特に酷かった沿岸部を視察した。鹿島町、それから少し北に位置する新地町などの沿岸部は壊滅していた。相馬市などで復旧作業にあたる自衛隊によると、未だに水が引かず、瓦礫撤去のための重機



南相馬市の保健所には、乳児用飲料水支給所が設置された

を用いる事ができず作業が難航しているということだった。津波被害に加え、原発災害に苦しむ南相馬市は本当に厳しい。放射能汚染地域と看做されてしまい物流が滞っている。

このような中、訪問した鹿島町の避難所では燃料を節約するために日中は暖房を切る事を余儀なくされていた。被災者は寒さのため、日が出て遅い時

間になっても毛布にくるまっただままだ。寒さは避難所の空気を暗いものにし、被災者の体力とともに気力をも奪っていた。

今回の震災を契機に我々の生き方について色々考えさせられた。原発のような巨大なテクノロジを動かすという事は、その運用が細分化、専門化、深化されるということだ。ある特定の分野に非常に詳しい者だけが扱える領域に、素人がなかなか侵入しにくい世界に生きるということだ。

例えば、原発建屋内の格納容器が無事かどうかを説明できるのは、設計者であり、冷却系統がどうなっているかを語れるのはそれに詳しい技術者や施工者である。飛散した放射性物質がどのような健康被害をもたらすかを語れるのは放射線医学者である。テクノロジが巨大になればなるほど、我々一般市民は、一体今何が起きているかを

把握しにくくなってしまふ。巨大で高度なテクノロジを用いる現代においては必然的にそういった傾向になってしまふ。つまり「分かる人に任せておけば良いのだ」という態度を取りがちになる。

それは一つ間違えば甚大な被害をもたらす原子力発電所の運営に関しても同様だ。本来このような「一つ間違えば、甚大な被害をもたらす」技術の運営に関しては、それを非常に細かく注視する姿勢が求められるが、それがなかなかそうはいかない。

様々なメディアで「人災」という言葉を目にした。今回の原発災害では、東京電力や原子力保安院による、事故処理における不手際や十分な設計基準を適用していなかったための「人災」であるとの声があがっている。

「人災」という言葉を調べてみると、「人間の不注意が元で起こる災難や災

害」とある。確かに局所的にみれば、東電や保安院の事故発生後の対応の不甲斐なさに目が行きがちになる。しかし「人災」という言葉には、

a consequence of a disaster caused by human neglect

「人が注意を払うべきものを軽視してきたことによる帰結」ともある。何かの操作ミスや、誤った行動を取った、もしくは不適當な判断を下したというよりも、「何かをほったらかしにした」、「注意を払わなかった」というニュアンスもあるようだ。

大局的な視点から見れば、これまで取られてきた日本のエネルギー政策に関して「注意を払うべきものを軽視」してきた我々、国民によるネグレクトがあったのではないかと強く思ってしまう。高度で巨大な技術を用いる現代だからこそ、また専門家と素人の乖離がより顕著になる現代だからこそ、より注視し、監視していかなければいけ

なかった。「理解が及ばない領域だから」といつて思考を停止させてしまいがちなものほど、後に発生するリスクは大きくなる。

活断層の真つただ中で運転を続ける浜岡原発しかり、中継装置が落下する事故を起こし、運転はもろろんのこと廃炉にすることもままならない「高速増殖炉もんじゅ」然り。今も福島第一原発を上回るリスクを孕んだ巨大なテックノロジーが、大半の国民の与り知らぬところでもぞもぞと蠢いており蓄積されたリスクがどつと噴き出して来るような気がしてならない。

私が派遣されていたイラクでは電気の安定供給が一番の問題になっており、電気事情が良い日本とよく比較された。「日本には停電なんてないだろう」「日本は民主主義の国だからな」なんてことをよく言われたものだった。

しかし電気という当たり前の存在がどういう形で生産されて、どんなリスクを孕んでいたか、我々はそれをほったらかしに、与り知らぬままにしていた。そんな我々が「民主主義の国」と呼ばれて称賛されてきたことをとでも恥ずかしく思う。

実は、今回の震災でイラクからも多くのお見舞文を受け取った。イスラーム教徒らしく真摯に被災者の平安を祈る言葉が綴られていた。その祈りとともに「その日大地はその消息を語ろう(99・地震章)」というクルアーン(コーラン)の一節が添えられていた。「大地は地表で人々が行ったことについて語る」ということだという。

今回の震災によってまさに我々が原発の危険性を甘く見てきたことが明らかになった。今、原発政策に対し強い後悔の念を感じる私にとって「大地は語ろう」というこの一節がとても暗示的に映るのである。

原発震災に直面している皆さま そしてすべての皆さまへ

谷田部 裕子

かけがえない命や家族や家や町を失われた皆さまのこ
とを、日夜思い続けて胸がしめつけられております。こち
らもひどく揺れました。また何のお役にも立てずについてほ
んとうにごめんなさい。

これを書いているのは本震から八日経った19日です。今
夜も強い余震がありました。グラウンドゼロがお手元に届く
頃、放射性物質の放出が何とかおさまっていますようにと
切に祈るばかりです。

私は、99年の茨城県東海村JCO臨界事故を経験しまし
た。家は2Km圏で屋内待避もしました。臨界は終息したと
いう誤った状況認識のもとに、もつと教室内にとどまらせ
るべきだった子ども達にわか雨にずぶ濡れになって下校
してきたことは忘れられません。以来ずっと、全国各
地に地震がある度に『震源地近くの原発は大丈夫か?』と
気をもんできました。……恐れていたことがどうとう現実
になってしまいました。

今、まだ頭が混乱しています。せつかく発信の場をいた

だけたのに、感情的で一人よがりな私信になってしまっ
とをご容赦ください。

この一週間、一時は心身共にかなりまいりました。でも
今は、甚大な被害にあわれている方々の困難を助け、これ
から先の私達皆の困難をしのぎ課題に立ち向かうために
は、気をしつかり持って、皆で心を通わせて協力してい
なければと思っています。それも、なかなか連絡がとれな
かった郷里福島の家族親族や、東北の友人達の一部の無事
がわかった故の恵ま

れた状況だからでし
よう。でも同時に毎
日強い不安の中にい
らっしゃる皆さまの
ことをひとごとでは
なく感じ続けており
ます。

お伝えしたいこと
はたくさんあるのに
整理ができなくて、
以下、思いつくまま
の書きちらしをしま
す。すみません。



2000年夏 JCS スタディツアーでゴメリ州立病院を訪れた谷田部さん

情報入手

正しく知ることは助けになります。日常生活に少し余力のある方は、流出放射性物質の内容や量や影響について、現地住民の知る権利を行使してください。

国には、普通の人にはわかるまで説明する義務があると思います。福島も他も、全体の電力を支えていますので。

臨界事故では、せめて子ども達が歩いて下校した道のモニタリング数値を知りたいとお願ひしても、記録用紙を紛失したとかで教えてもらえませんでした。東海村住民ならば依頼できた自宅の土壌調査も、隣り町住民の依頼は一事が現場からより近い距離にもかかわらず一行政区が違い協定が結ばれていないと断られました。

パニックや心配のし過ぎはいけなけれど、ただやみくもに安心することはできません。知ることをあきらめずになりたいです。テレビラジオの報道以外にも発信はあります。

免疫力を高めること

元氣になりたいと思うことが土台だと思います。同じ環境におかれても健康被害の出方には個体差もあると思います。厳しい状況ですが、どうぞ皆さまにできる限りの栄養と休養、そして愛とほほ笑みがあらんことを願ひます。

困った時はお互い様、笑う門には福来たるですよ？

周りの人々と仲良く、他人同士も声かけ合って、皆がひとりぼっちにならないようにと願ひます。

健康診断受診

落ち着かれたら是非受けて、定期的に継続なさってください。臨界事故の後『ただ不安を抱えていても、いいことはない。できるのは早期発見と早期治療』と、長年被ばく医療にたずさわってきた専門家から教わりました。低線量被ばくや内部被ばくの影響に長期にわたって皆で留意しましょう。

臨界事故施設周辺の住民に対しては、実被害が及ぶ数値ではないが不安に対処するという名目で、いまだに年一回県主催の無料検診が実施されています。住民による継続要請が強かったです。今回も皆で要望していきましよう。健康が大切ですから。

風評被害と実被害

19日夜のニュースで、福島の前乳や茨城のホウレンソウが基準を超える線量検出で出荷自粛と聞きました。問題なしとされた臨界事故時でさえ、大量の農作物が売れずに捨てられ、海産物や旅館業等々、打撃を受けました。今回はさぞやと思います。電力供給は公の為です。地震被害に加

えての二次、三次の被害に対して、第一に公的に、そして被災地以外の全ての人々の良識とサポートを願います。

原子力防災

天災はやってきます。それに人間はミスを犯す存在です。せめて、防災対策における人災を減らしたいです。避難路や交通手段、受け入れ先の確保、非常時の指示系統等々、充実しなくてはならない備えは、他の地域にも共通と思います。原発施設内には自前の常設消防体制はあるのでしょうか？ 建設当初の耐用年数の予定を超えて運転し続けても本当に大丈夫なんでしょうか？

今は、一人一人ができることをして、希望を失わずにいたいものです。

末筆になりましたが、各地の現場でみんなの為に不眠不休で対応されている方々、被ばくの危険の中で献身的に対策作業にあたられている方々に、心より敬意と謝意を表します。

そして、私達人間がもう少し息をついたら、あらためて、汚してしまつた大地、海、空、水に、それらを共有している他の生き物や植物に、懺悔の念をもって、謝りたいです。

生きていてください 2011年3月 彼岸記

千年に一度の津波がきた

幾万もの命がなくなった

家や港が

町や田畑が

のまれて消えた

宇宙にまでも行ける現代なのに

飢えと寒さと不安の中にいる

はらからのもとに行けない

人間は うんと利口になったわけなのに

核エネルギーは 食べられやしなくて

今、空気や水に、葉っぱや魚に、

ああ、なんと

私たちの命の源に

私たちの手で 毒を入れてしまった

チェルノブイリで

たくさんの方々が 地図からも消されたことを知っていたはずだったのに

今 また、この日本から
村や町の営みが消えようとしている

ふるさとが消える？

そんなのって ありえない！

失うもんか

守らなければ

だから みんなみんな

どうか生き延びて

生きていてください

生き延びて

みんなで暮らしていけば

そこが ずっと ふるさと

(筆者は、東海村JCO臨界事故後、仲
間と東海村で映画『ナージャの村』上
映会を開催しました。JCFのポラン
ティア)

「福島原発震災の被災者支援募金」のお願い

JCFでは被災地支援のため募金募集を行っております。

3月末日までに14,170,639円のご寄付が集まりました。たくさんの
応援をありがとうございます。

頂いたご寄付は、原発被災者支援の医薬品と現地で必要な物資の購
入費、またその輸送費に充てます。

以下の郵便振替口座に「震災支援」とご記入下さい。

口座番号：00560-5-43020

口座名：日本チェルノブイリ連帯基金

連絡欄：震災支援

インターネット銀行および他金融機関からの振込用口座番号

059 (ゼロゴキュウ) 店 (059)

当座 0043020

JCF 設立 20 年を迎えて

鎌田 實 (JCF 理事長)



皆様のお力でチェルノブイリの子どもたちの救援活動も、まる20年が過ぎました。おかげさまで。会員になつてくださったたり、ご寄付をくださったたり、JCFの催しに参加してくださったたり、JCFの物品を購入してくださったたり、あるいはグラウンドゼロを見てくださったたり、たくさんの方のご支援を頂いてきました。感謝、感謝、感謝です。

3月11日に突然、大地震、津波、原発事故が起きました。JCFは理事会の了解のもと、福島原発から近い、南相馬市に医薬品、医療団、避難所へのあたたかな食品の支援などを3回にわたって行いました。チェルノブイリと20年間関わってきたことが、今こそ、お役に立つ時だと思っております。理事会の指示に従いながら、しばらくの間、日本を守るために、全力で働きます。今まで以上のご支援をお願いします。

1986年4月26日にチェルノブイリ原発4号炉の大爆発事故がありました。今年で事故が起きてまる25年になろうとしています。25年経つ今も、ベラルーシ共和国のベトカ地区では高汚染の森が残っています。

1990年に、モスクワに会社を持っていた沢渡肇さんと、マリーナさんというモスクワ大学の日本語学科を卒業

した女性が諏訪中央病院にやってきました（マリーナさんは数ヶ月前、モスクワのドモジエドボ空港でテロに遭い亡くなりました）。

チェルノブイリ原子力発電所が爆発した後、子どもたちに健康被害が起きているらしい。しかし当時のソ連邦の政府ではきちんとした手が打てていないようだ。どうも子どもがたくさん死んでいるみたいだ。東西冷戦下で、ベールにつつまれた、見えない不気味な国で何かが起きている。そんな国の子どもを助けてもらえないだろうかと要請を受けました。

諏訪中央病院を新築し、病院長になってまだ日の浅い時期で、やらなければならぬ事もたくさんありました。何度もお断りをしましたが、現状を見るだけでもいい、特に医師に現場を見てもらいたいと言われました。子どもには責任がないと思いました。重い腰を上げました。

ウクライナ共和国のいくつかの病院をまわりました。チェルノブイリ原子力発電所にも入ろうとしましたが検問が厳しく、数キロの所までで、エリアに入ることは出来ませんでした。しかし発電所の周りの村は強制移住、汚染された建物を取り壊され、埋葬の村と呼ばれていることも分かりました。風が南から北に吹いていた為、チェルノブイリの北側に汚染が酷いことが分かり、ベラルーシ共和国の

病院を見てまわりました。当時のウクライナ共和国やベラルーシ共和国の医療の遅れに驚きました。

顕微鏡に使われる血液の細胞を乗せるガラス板に窓ガラスの破片が使われていました。これでは、血液細胞もよく見られません。顕微鏡も年代物の古い型の物でした。白血病のタイプ診断もとてもまともに出来ないだろうと思いましたが。注射針は煮沸して何度も使っているようでした。感染症対策も充分ではなく、血液病棟に入院している子どもたちは肝炎に罹って、黄だん症状が出ていました。

顕微鏡のガラス板や注射針ならば、ぼくたちの小さなNGOでも支援が出来ると思います、1991年1月第1回の訪問団の後、寄付を募りました。予想もしていなかった程の大きなご寄付を頂きました。注射針だけでなく抗がん剤や抗生物質も送ることができました。ベラルーシの病院が想像以上に感謝してくれ、信頼関係ができてはじまりました。

信州大学が強力な支援をしてくれました。小児科を中心に、外科、放射線科、検査室など大学を挙げて協力をして頂きました。時にはベラルーシの放射能の汚染地域に住む子どもを連れてきて信州大学で検査や治療をしてもらったこともあります。ベラルーシのドクターたちを信州大学で何度も何度も研修させてもらいました。双方向テレビの設置も信州大学の先生たちのお力で実現し、当時では世界的

な先進技術を使って医療支援を行いました。

ベラルーシの子どもたちが来た時には、松商学園の学生さんたちが親身になってサポートしてくれました。松本を中心に長野県の方々にいろいろな形でのご支援を頂きました。京都や茨城や東京などたくさんの方々が積極的に力を貸してくれました。

メデイカルエンジニアの専門家集団も自らのグループを作り、専門的な応援をしてくれました。

信濃毎日新聞をはじめたくさんの方々の新聞やテレビ局が20年に渡って報道をし続けてくれました。本当にありがたいと思っています。

カタログハウスが長い間、会社を挙げて応援をしてくれました。同時に「通販生活」の読者からも心温まる応援をいただきました。キリンビールや協和発酵キリンが、白血球を増加させる薬や抗がん剤を大量に寄付してくれました。

郵貯がやっている国際ボランティア貯金からも大きな応援をいただきました。外務省関連の応援もいただきました。市民を中心に民間の企業や、公的な分厚い応援をもらいながら20年走つてくることができました。

事故後25年経った今も放射性物質の汚染が残っているベト力を中心に支援を続けています。原子力発電所の事故が

一度起きると大きな被害が出ます。2度と事故が起きないように、核燃料を使う危険性を訴え、自然エネルギーへの転換を提言していきたいと考えています（この文章のほとんどは、震災前に書いたものです。後悔が残ります。もっと強く、自然エネルギーへの転換を訴えなければいけませんでした。残念、残念です）。

一方、劣化ウラン弾が使われた湾岸戦争やイラク戦争以後、イラクの子どもたちに小児がんや白血病が増えている可能性が強まり、JCFはジャバン・イラク・メデイカルネットワーク（JIMNET）の一員として約7年、イラクの病気の子どもたちの支援も中心的に担ってきました。

世界の平和を目指し、核の無い世界を創り、子どもたちに放射性物質による健康被害が起きないように世界にしていきたいと思います。JCFとしては今後ともメッセージを発していきたく思っております。ぜひ今後とも温かなご支援をよろしくお願いいたします。20年間のお力添え、本当にありがとうございます。感謝、感謝、感謝、感謝。

チェルノブイリ事故25周年によせて

高村 昇

(長崎大学医歯薬学総合研究科
放射線疫学分野教授)

1986年4月26日に発生したチェルノブイリ原子力発電所の事故から、今年で25年がたちます。長崎大学は、1990年からチェルノブイリ周辺住民の検診活動を笹川保健協力財団の協力のもとで開始し、外務省や文部科学省、あるいはWHO（世界保健機関）とも連携をしながら、現在に至るまで現地における活動を継続してきました。御承知のように、チェルノブイリでは



ゴメリ州立病院で高村医師（左から2人目）

事故後、小児甲状腺がんが激増しました。当時小児だった世代は現在20代後半から30代という、社会の中核を担う時期に差し掛かっているのですが、事故から25年がたった今でもこの世代には高い頻度で甲状腺がんがみられています。これは、25年前の原子力発電所事故によって被ばくした影響が、特にこの世代では（おそらく）一生発がんリスクの増加という形で残る可能性を強く示唆するものです。

これと全く同じことは広島・長崎の原爆被爆者にも当てはまります。原爆被爆者において白血病や種々のがんが増加することはよく知られていますが、これまでの研究で、この発がんリスクはやはり一生継続可能性が示されています。広島・長崎とチェルノブイリでは、原子爆弾と発電所の事故、という被ばく形態の違いはありますが、放射線被ばくによる健康リスクが長期、おそらくは生涯にわたって増加するという点では共通していると言えます。

このような事実を踏まえ、私たちは現在も頻繁に現地に足を運び、種々の調査・研究を継続しています。2008年からは、より効率的に研究を推進する目的で、事故によってもっとも甚大な被害を受けたベラルーシ共和国の首都ミンスクに、長崎大学の代表部を設置し、常駐のスタッフ（調整官）を中心に活動を行っています。ここでは現在進めら

れている調査について、いくつか御紹介したいと思います。

意外に思われるかもしれませんが、そもそもどうして放射線を被ばくすることによってがんになるのか、というメカニズムは、実はほとんど解明されていません。そこで長崎大学では、実際にチエルノブイリ周辺で発症した甲状腺がんの手術摘出標本を提供していただき、遺伝子を抽出して、異常がないかどうかの検索を行っています。

その結果、甲状腺がんを発症した人の遺伝子には、特定の部位に異常を持つ人の頻度が高いことがわかってきました。今後さらに詳しく調べることによって、放射線被ばくががん発症のメカニズムについて、その一端が明らかにされていくことが期待されます。

さらに、事故後25年の間、多くの住民は放射能によって汚染した地区に居住し続けており、そのことによる健康リスクを懸念する声も多く聞かれます。さらにはそれによる「心の健康」をどのようにケアするか、という点も非常に重要です。私たちは、事故による汚染が最も甚大で、甲状腺がんの発生数も多いベラルーシ共和国のゴメリ州を中心に、住民が摂取している食物（キノコや麦など）や居住している地区の土を採取し、その中に含まれる放射能の分析を

行っています。さらには現地の医療機関と協力し、特殊な測定機器を用いて住民の方の体内にある放射能の分析も行ってきました。

その結果、現在でも、チエルノブイリ周辺地区はある程度の放射能汚染が存在することが明らかになりました。ただし、それによって住民が

被ばくする量（放射線量）は極めて低く、ほとんどの住民が1年間あたり胸部エックス線撮影1枚程度の、ごく低い線量しか被ばくしないことも明らかになっています。以上のことから、現時点でチエルノブイリ周辺地区に居住して普通に生活することによる健康リスクは、それほど大きくないことが予想されます。ただし、現在でも発電所周辺のいわゆる「30 kmゾーン」、つまり周辺30 km以内の地区に住することは原則として禁止されていますので、今後はこ



ベラルーシ共和国ゴメリ州の土を採取する高村医師（右）

のような地区における評価も必要であろうと考えています。

その一方、住民の「心の健康（メンタルヘルス）」をどのようにケアするかという点も非常に重要な課題です。

私たちは、ゴメリ州にあるゴメリ医科大学の医学生を対象にアンケート調査を行いました。彼らの精神健康度と関連する項目について調査を行いました。その結果、「自分が健康上何か問題が起った時には、それが放射線被ばくのせいだと考えてしまう」と答えた人は、精神健康度が非常に低い、つまり「メンタルヘルス」に問題がある可能性があることが示されました。

ここで気を付けなければいけないことは、この調査の対象者は、すべて事故の後に生まれてきた人である、ということ です。チェルノブイリ周辺地区に住むことによつて、事故後に生まれた若い世代にも、精神的な影響がみられるかもしれない、という事実は、今後いかに正しい情報を発信し、住民の健康を守っていくかということを考える際、非常に大切な点であると思います。

以上のように、これまで20年余りにわたつて、長崎大学はチェルノブイリにおける医療支援、調査研究を行つてき

ましたが、まだまだ解決しなくてはならない問題が多く残されていることがわかりただけたのではないかと思えます。

事故から25年がたち、ますます事故は風化していつていきます。しかしその一方で、被ばくによる健康リスクを抱えた住民をどのように守っていくかは、ベラルーシ、ウクライナ、ロシアだけの問題ではなく、世界レベルで考えなくてはいけない問題であり、被ばく国日本が果たすべき役割は、今後もますます重要になると考えられます。これまでもJCFの活動にはずいぶん励まされてきましたが、今後もお互いの得意分野を活かしながら、チェルノブイリの人たちの健康を守るために貢献できれば、と考えています。

（この原稿は、震災以前に寄稿されたものです）

チェルノブイリからの

いただき物

カ丸 邦子



ゴメリ放射線医学人間環境センタープレイルームで子どもと手遊びをするカ丸さん

25年前、ベラルーシという国を私は知らなかった。それが1997年夏、

チェルノブイリ原発事故によって小児甲状腺がん、小児白血病に罹患した子ども達を元気づけようと、初めてベラルーシを訪れた。ビレイカの森の中にある保養所で、チェルノブイリの首輪と呼ばれる赤紫色の、みみず腫れの手術痕を持った子ども達と出会った。子ども達のこの悲しみを、子ども達の存在を、日本の人達に知って欲しいと強く思い、翌年、小さな図書館でこの事を伝える会を開いた。その会に宮尾彰氏（本誌連載随筆の筆者）の姿があり、その後温かい手紙を頂いた。

…個人的なかわりの仕方に大変興味と共感を覚える者です。…「ああ、このすてきな活動はできればそつと、とつておきたい。」と思います。声高なキャンペンばかりが支援ではないのですから。

この手紙には励まされて来た。

ベラルーシの子ども達を知ってから思うことはひとつ。どうか元気を出して欲しい。そのためには自分に何ができるか、それだけを考え続け、1999年夏、再びベラルーシを訪れた私は、自分でも呆れるような答えを出した。そして、「みなさんに手紙を書きたい。もし返事をくれるなら活字体で書いてください。私はロシア語はわかりません。でも活字体ならば辞書を引いて読むことができるでしょう」と、子どもたちに声をかけ、住所を教えてもらった。

「お元気ですか？」「元気でいて下さい」この二つの言葉を届けるだけでいい。子ども達が少しでも明るい気持ちになってくれたらそれだけでいい。偽りのない気持ちだった。せつせと手紙を書いた。次々と返事が届いた。二つの言葉では足りず、三つ四つ…たくさ



ゴメリ州立病院で

んの言葉が交わされ、やがて子ども達の心も開かれ、悲しい事も苦しい事も書かれるようになった。

「学校で、お前はベラルーシ人ではない。チエルノブイリ人だと言われ、身分証明書を破り捨てられた」。そんな手紙を受け取った日は明け方の3時までかかって返事を書いた。「辛かったね。悲しかったね。でも、あなたはベラルーシの子どもです。誇りを持ちなさい」と。

文法なんてもうどうでもよかった。ただこの子の悲しみを半分引き取ってやりたかった。今はもう悲しい便りは少なくなつた。多くが親になり、我が子の成長を伝える楽しいものになっていく。子ども達はいつしか私の息子であり、娘になった。加えて私はバアバにもなった。

そんな子ども達の中に「病の淵に苦しむ人たちに寄り添いたい」と医師をめざして学んでいる娘がいる。タチアナ（ターニャ）と言う。母親と妹の三人暮らし。2002年初めて彼女の家に招かれた時、希望の見えない状況に疲れていたのか、母親、ニーナさんの話す言葉は力なく消極的だった。私は失礼を省みず言ってしまった。「先の事は、人間、生きてみなければわからない」と。親子三人、じっと私を見つめていたあの夜の光景は今でもはつきりを覚えている。その後、三人は会う

たびに明るくなつていった。

ターニャが大学に入った時、ニーナさんは「クニコさん、6年間よ。6年は長い」と頭を抱えた。多分娘達には見せたことのない姿、たつただろう。すかさず私は言った。

「ニーナさん大丈夫。一人じゃない。私もいる。二人よ。だから大丈夫」

私の考えは単純で、本気で勉強したい人は学校に行けばいい。助けが必要なら手を貸せばいい。それだけの事。

昨年の八月、ターニャが来日し、長崎大学で医師研修を受けた。長崎の皆さんにとっても良くして頂いて、JCFの神谷さんの助けもお借りして、夢のような体験をさせて頂いた。

医療水準の高さへの驚きはもちろん、世の中にはこんなにも素晴らしい事があるのかと、目に映るものすべてが感激……。彼女の話す声の弾みからそれはわかった。

あつという間の十日間の研修が終わり、日本を発つ朝、成田に付き添って来た大学職員の手さんから私は聞かされた。ターニャはとても優秀な学生ですと。いくつか具体的な例を挙げて、たくさん誉めていただいた。

ありがたくて、ありがたくて、うれしくて、すれ違う誰でもいいから呼び止めて「ターニャが誉められたのよ」と話したかった。

Ｔさんが「ターニャと初めて会った時、彼女はいくつでしたか？」と聞いた。「11歳です」「ほおう」。横からターニャが「なあに？」と聞いた。説明すると「そうよ。そうよね」と思いつきりの笑顔で頷いた。その顔を見て「あーっ、ターニャ。あなたおとなになったのね！」はっとした。15歳も19歳も……ずっとこの娘を見ていた筈だった。が、私が見ていたのは、あの夏の日の11歳の少女だったのだ。

出発ゲートに向かう為エスカレー

ターで降りて行くターニャをガラス越しに見ていた。顎を少し上げ視線を高くして正面を見ているターニャ。あんなてきれいな娘、だろうと思った。自信を持った人の顔だと思った。

この25年の間、世間から騒がれることのない場所で子どもの命を必死に守り抜いた親たちがいる。懸命に生き抜いた子ども達がいる。その子ども達も多くは新しい命を授かり、親に守られた命を次に繋いだ。親を労り、子どもを慈しみ、ゆったりと暮らしている。辛い事、苦しい事、悲しい事などなかったかのように穏やかに、つつましく、自分たちの暮らしを。

ああ、この人たちに会えてよかった。本当によかった。

この出会いはチェルノブイリからのいただき物です。



ゴメリ放射線医学人間環境センターでプレイルームの子ども達と

第10回 JIM-NET会議

2011年度支援内容確認



第10回 JIM-NET会議参加メンバー

2004年から、イラクの小児白血病・小児がんへの医療支援を始めた。

JIM-NET会議は10回目を迎えた。イラクでは治療成果が画期的に改善されている。

日本とイラクのささやかな協力が、未来に向かって結実していく。

第 10 回 J I M—N E T 会議

2010 年治療データ発表と 次年度の支援項目の確認

神谷さだ子（J C F 事務局長）

2月20日・21日、イラク北部クルド自治区アルビルにおいて、第10回JIM—NET会議が開かれた。クルド自治区のナナカリー病院・ドホーク病院、イラク、バグダードからセントラル小児教育病院・小児福祉教育病院、バスラ小児がんセンターから計14名の専門医が集まった。日本からは、信州大学医学部附属病院小児科の坂下一夫医師、イラクから来て信州大学医学部大学院博士課程で学んでいるリカ医師、JIM—NET医療コーディネーターの井下俊医師をはじめスタッフ、オプザーバーを含め13人が参加した。

各病院から、2010年の1年間の小児急性リンパ性白血病患者の治療データが報告された。バグダードの2病院では、3年前のクアラルンプールで開かれた会議で信州大学小児科の小池教授からのアドバイスによって、ステロイド剤を使うようになり、寛解導入率が劇的に上がった。

一方、バスラのフサム医師から、昨年10月新しいがんセンターが完成したものの、抗生剤や化学療法薬の不足している。交通費がないために病院に來られず治療を中断する患者がいたり、患者家族が化学療法を信じないで、診断や治療の好機を逃がしてしまふと報告された。

第2部では、バグダードの2病院から、2006年と2009年の生存率比較が発表された。セントラル小児教育病院では、寛解が継続している患者は2006年23%、2009年には64%に上がっている。清浄水はなく、電気も停電しがちな中で、JCFが支援したセルセパレイターを使った血小板輸血も順調に行なわれており、病室もゆとりを持たせるなど、医師達の頑張りが、数値に表れていた。

小児福祉教育病院のマゼン医師の発表は、画期的であった。2009年の新規患者数は119人、その半数が、

新しいイラクに変わる

加藤 文典
(JCFイラク事務局)



公共サービス改善を訴えるイラク市民

チュニジアやエジプトから始まった民衆によるデモは「怒りの金曜日」として中東全体に広がっていった。毎週金曜日にイスラーム教徒はモスクで集団礼拝を行うが、「怒りの金曜日」というのは、そこで市民が集い大規模なデモが行われたためそう呼ばれる。非常に強固であると思われた独裁体制がエジプトで崩壊したことで中東全体が勇気づけられ自分の国でもそれが可能だと立ち上がったのだ。毎日テレビを見ていたが、どの国でも市民は「シャブ・ユリード・イスカート・ニザーム！（民衆は体制の崩壊を望む！）」を大合唱し、体制側の武力をもとめせず突き進んでいった。正直なところ見ていて痛快だった。

このアラブ大革命ともいえる民衆蜂起はイラクにも当然広がった。しかしイラクでの民衆の要求はエジプトやチュニジアとは少し異なっている。そ

れはデモ隊のスローガンにも示されているが、体制の「崩壊（イスカート）」ではなく「修繕（イスラーフ）」を望むとしたところだ。昨年の初めにイラクでは国民議会選挙が行われたが、中東の選挙では珍しいといっても良いくらい、ある程度民主的な選挙が行われた（しかしその後組閣に8か月以上要した上に内務省、防衛省といった重要ポストが未だに未決定ではあるのだが）。

そういったところからイラク国民が「体制の修繕」を掲げたというのはどういうところにあるか。簡単である。電気供給、失業問題、行政腐敗などの行政サービスの修繕を求めているということだ。イラク戦争から8年が経過しようとしているが、電気供給などは一向によくならず、失業率も30%近くと深刻な状態である。デモを行う民衆の中にはユニークなものもあり、「ヒドマート（公共サービス）」と刻まれた棺桶を担いでいたりした。市民のこう

した怒りは留まるところを知らず、県庁を襲撃するまでに至った。既にイラクではバスラ、バール、ズイーカールの3県で知事が辞任するという事態にまで発展しており、今後は全県議会を一斉解散させるかという勢いだ。

こういったデモの最中、2月20、21日とアルビルではJIMNET会議が開催され、イラクの主要都市から医師が集い2010年度の治療成績や今後の課題について議論がなされた。

治療成績は年々良くなっているし、議論の内容もかつては薬不足を嘆き合うだけだったものが、高度な分析を行えるまでになった。

バグダードの小児福祉教育病院のマーゼン医師は「5年前はこういった会議を行うことは夢だと思っていた」と語った。また同病院のサルマ医師は「こうした分析を行うことで生存率が上がっていることがわかり、治療を行

うためのモチベーションが高まった」と言ってくれた。皆が積極的に前向きに議論する姿を見てイラクの小児白血病治療においてもようやく希望が見えてきた気がした。

首都バグダードではデモ隊の暴徒化を懸念して設置された巨大なコンクリートブロックが民衆によって押し倒されるシーンがテレビで流れたが、映像は2003年のバグダード陥落直後にサダム像が引き倒されたシーンを彷彿させた。イラク侵攻後サダム政権が崩壊して以降、一応の民主化がなされたが、国民生活は一向に改善されず、治安は泥沼の様相を呈し、戦争終結宣言後もイラクには「さあ、新しいイラクはこれからだ」というような区切りがなかったように思える。しかし今回の民衆蜂起でこの巨大なブロックが押し倒されたとき、ここで区切りが付くのではないかという気がなんとなく

た。

医療の分野でもそうだ。そろそろ変わるべきなのだろう。そうなら目標としている骨髄移植なんかあつという間にできてしまいかもれない。もともとそれだけの力がある医師達が、必死で努力しているのだから当然だ。新しいイラクが変わるときが来ているのだろう。



バグダード小児中央教育病院マーゼン医師と患者さん

ミツバチの羽音と地球の回転

スウェーデン — 祝島
エネルギーの未来を切り開く人々



ミツバチ松本上映、 そして羽ばたくミツバチたち

平島安人

(ミツバチ松本上映実行委員会代表)

頼まれていた原稿をJCFの布山さんに送信したのはいみじくも3月11日の朝でした。その日の午後、まさかあのような天災と人災が起きるとは。

いや、原発事故はいつか起きると思っていたので、起きたこと自体にはあまり驚きませんでした。現実のこととなってしまうとその重大さに心は揺れ動き、折れそうになりました。ぼく程度の知識でも、政府や保安院の説明と実際に起きていることにはあまりにも大きな離れがあること、そして初動の誤りと遅れは明白にわかり、その後どのように展開しそうなのか想像できてしまったのです。

自然現象は想定外であっても原発事故は起きることを想定しなければいけません。では想定外にやってくる自然現象に対して、どの程度の事故が起きると想定し対処すればよいのでしょうか。答はただ一つ。原発は作らない、これが答です。原発がないと停電が起きると電力会社は脅します。しかし、原発があるともっと大変なことになることがこれでよくわかったのではないのでしょうか。あつたほうが大変なものなど、すみやかに終わらせていきましよう。しかし、ともかく今は福島第一原発を何とか鎮静化しなければいけません。今日は4月2日。グラウンドゼロが発行される頃には、多少なりとも先行きが見える状態になっていることを切に願っています。

実行委員会は上映だけで終わらせることなくこれからも歩みながら考えよう、毎月集まろうと、3月8日には「グリーン電力証書」と「信州自然エネルギー協議会構想」について勉強会を開きました。自然エネルギー100%をめざし、途切れることなく松本の羽音をうならせていこうと思っていたところへのこの事故。

まず目前の問題に対処するため、松本市・塩尻市・安曇野市・辰野町の首長に、中部電力に対して浜岡原発の運転停止を要請するよう提案しました。

「新耐震基準の福島第一原発があのようになり、安全基準の無効性が立証された。福島より地震のリスクが高いところに立地し、福島と同一炉型の浜岡は、少なくとも福島が鎮静化し原因究明が終わるまでは停止すべし」という主張です。松本の動きをうけ、県内の他地域でも同様の提案が出始めました。他にも原発に反対してきたぼくたちだからこそできること、やるべきことがあるだろうと取り組んでいます。そして、同様な県内の動きを共有するためのネットワーク作りに着手しています。

以上、今回の原発人災事故をうけ、提出済みだった原稿に加筆させていただきました。以降は事故前に書いたものです。

1月15日、土曜日、雪模様、そして何よりも大学センター試験の初日。ぼくは一抹の不安を抱えつつ駅へと向かいました。『ミツバチの羽音と地球の回転』松本上映会の朝のことです。

天候に恵まれないことが多いセンター試験、天候が良くてもそもそも試験日なので都合が悪い人も多い、チケットの前売り状況もそこそこ、つい悪いことばかりが頭に浮かんでしまいます。でも、そんな不安も何のその、いざ幕を開けてみれば会場は多くの人の熱気で包まれ、結局は350人を超える市民の方々が来てくれ、松本からもミツバチの羽音がしつかりとうなりをあげたのでした。

2009年3月15日、東京大学本郷キャンパスで「ぶんぶん通信」上映会が開かれ、ぼくも参加しました。ミツバチ監督の鎌仲ひとみさんはビデオレターという手法を使います。映画制作のための取材映像をまとめたビデオレターを公開しながら映画制作を進めます。ミツバチ制作のためのビデオレター「ぶんぶん通信」第1巻が完成し上映会開催となったわけです。鎌仲流の情報公開、このようなことを積み重ねていくことで、最終的な制作物への期待も高まろうというものです。

この日の夜、ぼくは自分のブログにこんなことを書きました。



“原発の場合はいつものことではあるけど、やはり憤慨してしまふことばかりだ。「原発」は「理不尽」と同義語だと思えてしまう。しかし、鎌仲さんはいつものように明るく元気に、「よいと思ったこと、やったほうがよいと思ったことは、自分でどんどんやってみようよ。そのほうが楽しいしさ」って呼びかけて、ほんとうにそうだよなあ。映画も秋には完成予定とのこと。松本でも上映会を開かないとね。”

映画は2010年春に完成し6月から各地での自主上映会もスタート、ところがぼくは何となくぐずぐずし、『六ヶ所村ラプソディー』松本上映の仲間に呼びかけたときにはもう7月。でも即座に何人もが呼びかけに応じてくれ、実行委員会を立ち上げました。みんなも誰かが呼び

かけるのを待っていたのでしよう。その気持ちがあぼくの背中を押し、ぼくの声がまたみんなの背中を押す、「背中を押すもの、押されるもの」、そんなことも感じた今回の上映でした。

実行委員会では映画の試写会や、原発の経済性や生物多様性について学ぶ勉強会も行い、映画への理解を深めていきました。実は原発は高コスト、そんな事実を知ったことで多くの人に映画を見てもらおうという気持ちが高まったの言うまでもありません。

上映は3回、途中にはトークセッションも行い、鎌仲さん、飯田哲也さん（環境エネルギー政策研究所所長）、美咲さん（ミュージシャン）に祝島や自然エネルギーのたいなる可能性について熱く語ってもらいました。美咲さんからは太陽光発電で充電した電池を音響電源に使う『光合成ライブ』



祝島へのメッセージを書く参加者

も。

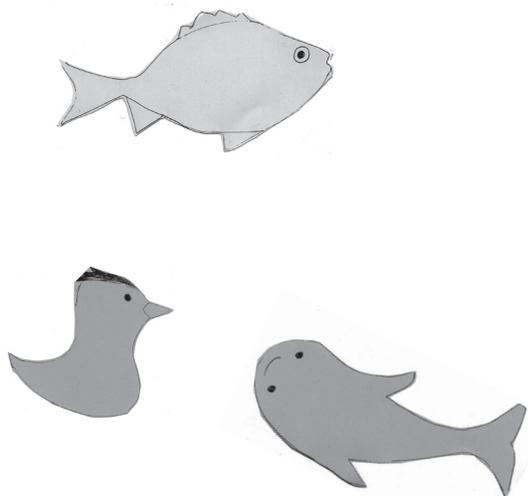
日本では原発しか
選択肢がないという
ような偏った情報だ
けが流され多くの
人がそう思い込ま
れている一方で、世
界の現実には風力や
太陽光が飛躍的に
拡大し、原発はむしろ
純減であること、そ
して自らの身を削る
ようにして30年近く
上関原発への反対を
続けている祝島の
人々の姿、そういつ
た話に多くの人が目
からウロコが取れ、
深く共感したのでは
ないでしょうか。

『六ラブ』に引き続
き今回も聴覚障害者
のための字幕を
用意しました。長
野サマライズセン
ターにお願いして
作った字幕データ
は、2月から始ま
った渋谷ユーロス
ペーでのロードシ
ョーでも使ってい
ます。ぜひ全国各
地の上映会でも使
ってほしいですね。
情報を障壁なく伝
えること、これも大
切なことですから。



上関原発や自然エネルギーについての署名に協力する参加者

他にも、祝島のピワ茶とひじきのおにぎりを用意したり、
長島の自然を守る会からお借りしての写真展示、数々の資
料や書籍販売、そしてメッセージボードと、実行委員のアイ
デアと実行力で盛りだくさんの内容となり、ホワイエは
来場者でこった返しました。来場者の想いを海の生き物の
カードに書いてもらい、瀬戸内海を模した台紙に張り付け
たメッセージボードは、約5万5千円のカンパとともに祝
島島民の会に届けました。



松本市長 菅谷昭 様

【提案書】 中部電力株式会社への浜岡原子力発電所の運転停止要請

2011年3月25日

私たちは中信地区在住の市民で構成する「ミツバチ松本上映実行委員会(代表:平島 安人)」と、本要請への賛同者一同です。

福島第一原子力発電所(以下、原発)の事故をうけ、ぜひとも松本市長に早急にご検討、ご決断を頂戴したい提案があります。

私たちからの提案そして切なるお願いは、市民の安全・安心確保のため、そして地震・津波・原発事故により大きな損傷を受けた日本の早期再興のために、

「中部電力株式会社に対し、浜岡原子力発電所の運転をいったん停止するよう、松本市長から強く要請していただきたい」

という内容です。

この提案の根拠は大きく2つあります。

1. 新耐震基準で審査された福島第一原発がこのような事態に陥ったことは安全基準そのものの無効性が立証されたことに他ならず、同じ炉型でありしかも福島第一原発よりも地震リスクの高い立地条件にある浜岡原発は、少なくともいったん運転停止すべき。
2. 福島第一原発は一刻も早く鎮静化させなければならない状況にあり、人も機材も国の総力をあげての対応をしているところであるが、先行きは不透明であり長期戦の様相を呈している。その状況下で、万が一浜岡原発において多少なりとも不具合が生じた場合、福島第一、浜岡双方にとって対応力確保が困難となる。リスクを低減し火急の問題に専心対処するためには、浜岡原発の運転停止が妥当である。

原発の是非の議論とは別に、総力を挙げてこの危機に立ち向かう今、新たなリスクを回避する意味から必要なことと考えての提案です。原発の停止期間については、上記根拠1.の観点より、少なくとも福島第一原発が鎮静化し事故の原因究明が終了するまでは停止すべきと考えます。浜岡原発の停止により電力供給能力は低下しますが、中部電力管内における省エネ・節電への意識の高まり、自主的な取り組み状況を見ると、安全・安心確保のためなら受け入れる素地も対応能力も十分にあるものと考えます。

今、多くの市民が見えない放射能汚染におびえる毎日を送っています。不安要因を取り除くことによって、解決すべきことに集中できる状態を作ることが求められていると思います。いったん立ち止まり、まず集中すべきことに集中する。そして次なることをよく考えることが、結局は早い解決につながるのではないのでしょうか。

新しい日本の国づくりのために、今まさに立ち止まる必要があると考え、以上ご提案します。

○回答について

私たちは3月末までに回答を頂戴することを希望しますが、ご検討のうえまず回答期日をご連絡くださるようお願いいたします。回答は期日までに文書もしくは電子メールで頂戴できると幸いです。

『ミツバチの羽音と地球の回転』を観て

有賀敬子（ミツバチ松本上映会ボランティア）

映画『ミツバチの羽音と地球の回転』を松本上映会で観ました。瀬戸内海に浮ぶ祝島の美しい風景―太陽にきらめく海、港に並ぶ漁船、冬に咲くヒワの花のまわりをミツバチが飛び交い、自然豊かな祝島が画面いっぱいに広がっていました。

しかし穏やかに見える祝島の生活に、30年近くも原発反対の壮絶な闘いが続いているのです。祝島の真正面の田ノ浦では原発建設計画が進められています。原発を建てるには、周辺の森林を伐採し、海を埋め立てなければなりません。田ノ



上映会当日、受付を手伝う有賀敬子さん（左から2人目）

浦の海を埋め立てられたら、原発ができる前に島は死んでしまうことを、第一次産業に生きる島民たちは日常生活から実感しています。

私はこの映画を見るまで、原子力発電所建設を反対する理由は、もし事故が起こったら放射能汚染とかが危ないからなんだろうなど、漠然と考えていました。チェルノブイリ原発事故のような大惨事をくり返さないための反対運動なのだと。しかし、それは浅はかな考えであったのだと、この映画を見て気付きました。未来に起こるかもしれない「もし」だけでなく、今まさに起こっている問題に目を向けないければいけなかったのです。

途中、映画の舞台は自然エネルギーの先進地、スウェーデンに移ります。ここでは、日本で将来どのようにエネルギー政策を転換させていくことができるか、多くのヒントが示されていました。中でも、電力市場を開放し、市民が「緑の電気」を使うか「汚い電気」を使うか、自由に電力を選択することができるようになったことで、一人一人がエネルギーの使い方にも意識を向けるようになっていて、ということがとても印象的でした。

今私は、中国の河北省の大学で学んでいます。市内を歩くと、工場もないのにレンガで造られた高い煙突が、あち



学内にある「暖気」のボイラーの煙突。冬は煙突からモクモク
と白い煙が上がる

の暮らす寮でも、11月中旬から3月中旬までの間、この鉄パイプが冷たくなることはありません。この暖房は黄河以北ならどこでも見ることができ、とても温かく、真冬でも快適に過ごせるのですが、一方で市内の空気がとても汚染されていることを、鼻をかむたびに実感しています。

世界有数の石炭生産・消費大国、中国。1997年、当時の李鵬首相がエネルギー消費構造の問題点を指摘し、石炭消費体質から天然ガス、石油、水力といったエネルギー多様化構造への転換策を發表したのをきっかけに、国としてエネルギー構造の変革を図っています。もちろん、

太陽光・風力・波力等の「緑のエネルギー」もエネルギー多様化構造に組み込まれてはいます。しかし、暖房設備一つとっても変換は容易でなく、石炭依存から抜け出せずにいます。さらに、温室効

ここに建っているのを見ることができます。なぜそんなにたくさん煙突があるのでしょうか。この施設では冬になると大量の石炭を燃やし、水を温めます。温水はパイプを通じて付近の建物（マンション、商業施設、学校など）に運ばれ、建物内にも張り巡らされた鉄パイプを通って、暖房として機能しているのです。内陸性の乾燥した気候で雨や雪は滅多に降りませんが、冬は連日マイナス10度以下なんてことも珍しくありません。そんな地域で暮らすには、この「暖気（ヌアンチー）」と呼ばれる暖房器具が必須なのです。私



温水が流れる、学生寮内の鉄パイプ

果ガスや空気汚染物質を出さずに、急激な経済発展に一番見合った「現実的」なエネルギーとして原子力が選択され、次々に原発が建設され続けていっているのも事実です。

石炭から石油、そして「核」へ。この構図は避けて通ることのできないものなのでしょいか。経済

発展を公害とともに歩んできた日本。同じように、歩んでいこうとする中国。中国に多くの友人ができ、中国の魅力を日々発見している私には心配でなりません。

私に今できること。小さいながらもミツバチの羽音を鳴らし続け、「きれいごと」だけじゃない日本のエネルギー政策の「光と影」を少しでもその友人たちに話していきたいと思います。



「太極扇」の発表会 有賀さん（右）



田ノ浦からの夕景（祝島ホームページ フォトギャラリーより）



NO.43
摂理の時

宮尾
彰

二〇一一年三月一日午後二時半過ぎ。

三年近く音沙汰の無かった友人から電話が入りました。

その声には、抜き差しならぬ状況から彼女が私に向けた再生への意志が宿っていました。駐車場で傾聴する内に、私に乗せた車は大きく揺れ始めたのです。

「And we are all mortal、

「私たちの誰もが皆、限りある命を生きている」

その数日前、渋谷のギャラリーTOMで観たイラン生れのアーティスト、ホセイン・ゴルバの個展『寛容の詩学』には、J・F・ケネディの言葉が引かれていました。

二〇一一年三月一二日未明。

どうしてですか？

私は無事です。

連絡をください。

F Mラジオからは、親戚の安否を問う伝言が夜明けまで流れ続けていました。

私たちにとって本当に大切な挨拶の言葉は、こんなにも単純素朴なのです。それを取り戻すために、深い闇の向うに夥しい被災者がひしめき合う夜が必要だったとは。

かつて、押田成人神父が預言したとおりに成りました。物質文明が崩壊する時には、きっと大きな音を立てる。

二〇一一年三月一二日午後二時。

私は車のラジオを聴きながら友人に勧められた小さな展覧会に着きました。会場であるパン屋の二階には、玉子のように丸い顔をした仏たちが私を待っていました。

店内に流れるラジオから、なるべく時間をかせぐという任務を帯びた職員が、何度も繰り返して原発事故の経過を説明し続けるのが聞こえて来ます。

「今こうして僕たちが見ているのは、この国の間違った骨組みが崩壊してゆく姿だよ。『被災地支援』なんて言葉で済む事柄じゃない」

ラジオの声を遮ったのが、仏たちの作者、阿羅^あ羅^らこんしん（本名大友慶次）さんでした。

時々刻々ともたらされる情報に私の意識は掻き乱されましたが、彼はそれをまったく超えたところで、その遠い眼差しで事象の全体を眺めているのです。

求められて、私は示されたノートに名前を書きました。

「僕、どこかであなたの文章を読んでいますよ」

「実は、グランド・ゼロに書かせていた、だいています」

この日この場所で、私たちが出会ったのは、正に摂理としか言いようの無い出来事でした。

帰り際、彼は私の掌にお手製の握り仏を置きました。

二〇一一年三月一三日午前一〇時。

一昼夜、事実を隠蔽しようと躍起になる政府は、黒い手で記されたシナリオに従い周到に計算されたタイミングで不明瞭な弁明を続けました。まどろむことを許されぬまま朝を迎えた私は、おのづから彼を再訪しました。

ラジオからは、相変わらず国民を欺^{あざむ}くための言葉が流れています。直に私たちの生活を覆うであろう、目に見えぬ底無し^{あざむ}の恐怖に備えるべきこの時に。

ここで気付かずに、ここで向き直らずに、この国に未来はありません。

別れ際、再び彼から託された石の印には『慈悲喜捨』の四文字が彫られています。

「中でも、最後の『捨』が一番大切ですよ」

今、百年を要するこの国の再建が始まろうとしています。



ベラルーシの食卓

ベラルーシの名古屋コーチンたち〜チキンのヨーグルト煮込み〜

板塀に囲まれた農家の中庭に、褐色レグホーンのニワトリが放し飼いにされていた。赤い鶏冠と尾の濃い褐色が美しく、名古屋コーチンかと思まごうばかりだ。おばあちゃんが、鳥小屋からエプロンに抱えてくる卵も、新鮮でおいしい。そして時には、手で絞められて、スープや肉料理に使われる。

サワークリームまたはヨーグルトで煮込むとまた変わった一品となる。

<材料 5人分>

鶏肉 500g・サワークリーム（ヨーグルトでも可） 大5・玉ねぎ 1個
にんじん 1本・ニンニク 1片・バター 20g・塩 コシヨウ 適宜

<作り方>

1. 鶏肉は一口大に切り、塩、コシヨウする。
2. 玉ねぎは、縦半分にして、スライスする。にんじんは3ミリ位の輪切り、ニンニクもスライスする。
3. 熱したフライパンに、約3分の2のバターと鶏肉を入れて、焦げ目が付くまでいためる。
4. 深手の鍋に鶏肉を移し、かぶるくらいの水を入れ、沸騰したらにんじんを加えて煮る。
5. フライパンに残りのバターをいれ、玉ねぎを炒めて、4.の鍋と一緒に煮込む。
6. 最後にサワークリーム（またはヨーグルト）とニンニクを入れて少し煮込み、塩・コシヨウで味を整える。





モスクワ便り

昨年はモスクワの猛暑についてご報告しました。この猛暑は、自然発火による火災をモスクワ周辺地域をはじめとするロシア各地に引き起こし、多くの災害をもたらしました。今回は、それと同じくらいに異常な現象についてお話ししましょう。去年の12月25日にモスクワを襲った『氷の雨』現象です。新年を目前にした冬の一番寒い時期に、空から水滴が落ちてきて、氷点下の地面に落下したとたんに凍りついたのです。奇妙な点は、12月に雨が降ったこと、そしてその雨が落ちてくる間に雪に変わらなかったことです。

気象予報士によると、地上1.5 kmの地点は0℃以上だったので雨粒でしたが、それが-4℃の地面に落ちた瞬間に凍結して、道路や樹木や自動車や電線を氷の層で覆ってしまったというのです。しかしそれを知ったのは翌日になってからで、私も他のモスクワ市民たちも、クリスマスの夜には知る由もありませんでした。その日私はいつもよりも遅く、晩になって犬の散歩に出掛けました。犬はいつも通り私よりも先に駆け出しました……そして滑って転んだのです！私も犬もびっくりしました。すぐに立とうとしますが、はじめてスケート靴を履いた時みたいに、足が開いてしまって歩けません。雪の吹きだまりもすっかり氷の層で覆われて、街灯の光に輝いていました。これなら、うっかり雪の中に埋もれてしまう心配もありません。木々の枝もガラスのように輝いて、氷の重みで地面すれすれまで頭を垂れています。ほんとうにおとぎ話のように綺麗でした！折れた枝がいくつか木々のそばに落ちていました。

翌日のモスクワではトロリーバスは運休し、大半の信号機は止まってしまいました。ドモジェドヴォ空港では送電線が切断され、掲示板の文字が消えて、乗客はどれだけ待てばいいのか、いつ出発できるのかさえも分からなくなってしまいました。モスクワ周辺地域の約10万人が停電に見舞われました。車は駐車場に止まったままです。氷が鍵穴を塞いでしまって、ドアが開けられないのです。道路はスケート・リンクに早変わり、歩くこともままなりません。医局長は住民に対して、食料を備蓄して外出しないように、客も呼ばないようにと勧告しました。さらに彼は骨折しないための正しい転び方で教えてくれました。

さて、今年の夏は、どんなサプライズが待ち構えているのでしょうか？

イリーナ・ニコラエワ（モスクワ事務局）

振替用紙のメッセージから



- ◎年末ジャンボ宝くじをやめて寄付させて頂きました。役立てて下さい。
- ◎皆様の二十年以上の活動にささやかな応援をさせて頂きます。
- ◎ほんのささやかですが、少しでもお役に立てれば幸いです。病と闘っている人々に笑顔が戻ることを祈りつつ…。
- ◎クリスマス献金です。
- ◎平和を愛する活動に心が大変あたたまります。
- ◎皆様のご活躍の様子などをグラウンドゼロで読み、感謝の気持ちでいっぱいです。
- ◎今年も心暖まるクリスマスカード、本当にありがとうございます。
- ◎今年もよく頑張った自分へのご褒美を寄付に。
- ◎クリスマスカードありがとうございます。とてもうれしかったです。
- ◎イラクの子どもたちにとって希望に満ちた楽しい年であるようお祈りいたします。
- ◎前号『グラウンドゼロ』の宮尾さんのエッセイ、「協働の基」にとっても感銘をうけました。人間のあり方の根元的な姿勢に、深く共感します。
- ◎前号「会員さん訪問」の上條さんのお話を読んで、そのお人柄や生き方に憧れました。いつかお会いしたいです！
- ◎12月4日のイラク3医師講演、とても良い時間でした。改めて現地の状況を考える良い機会になりました。
- ◎昨年12月22日福山のリーデンローズトーク&クリスマス。ジャズコンサートご協力有り難うございました。少しですが寄付させて頂きます。

〈震災後〉

- ◎地震被災地へ募金の他、はがき200枚を贈ります。使ってください。
- ◎被災地の方々、大変な環境のなかですがお大事に生きて下さい。駆けつけて下さる方々ありがとうございます。
- ◎一緒に前に進めるように少しでもお役に立てればと思います。
- ◎すばらしい活動、本当にありがとうございます。又お金ができたら振込させていただきます。心から応援しております。感謝の心をこめて…。
- ◎鎌田さんのブログ拝見しました。「ピンチをチャンスに！」その通りだと思います。それぞれの場ががんばりましょう。
- ◎福島原発被災者の皆さま、勇気を出して下さい。応援しています。
- ◎皆様のご健康が守られ、笑顔が一日も早く戻ってきますように。
- ◎イベントをやってお金を集めました。少額ですが、何かのお役に立てた

らと思っています。

- ◎被爆者（長崎）のひとりとして、今回の原発事故は心が痛みます。どうぞ福島で被爆されている方々の力になって下さいませ。皆様のご健康が守られますことを祈っております。
- ◎池田香代子さんからの御紹介です。お役立て下さい。
- ◎今一番苦しく辛い方のためにお役にして下さい。早く原発事故が治まり皆様に笑顔が戻りますように…。
- ◎今までの皆さんの活動の成果を生かして頂けると思っています。ささやかですが送ります。よろしくお願ひします。長年のチエルノブイリとのお付き合いで蓄えた正しい情報を提示してください。
- ◎少額ですみません、ご活躍期待しています。また協力します。
- ◎優しい心づかいを共になんばりましょう。
- ◎わずかですが、この度の大災害、人

災にお使いいただけますように、被害が少しでも少ないことを祈っています。

- ◎辰口町の雑木林のパンやさんからお知らせ頂きました。何ということでしょう。改めて色あせたチエルノブイリの周辺の地図をながめています。（壁にずっと貼ってあります）
- ◎かまた先生のブログで見ました。ミクシーの友達が教えてくれました。
- ◎スタッフをはじめ医療従事者の方などが南相馬市に行くことを知りました。原発周辺に住む方々は首都圏で電氣を使っている私たちの身代わりになって、本当に申し訳なく思います。支援に行かれる皆様もどうかお身体に気を付けて下さい。心から応援しています。

Здравствуйте!



Иракуの医師からもたくさんのお見舞いのメールが届いています。

☆ ターリク・シュジャイリー医師 (バグダドのセントラル小児教育病院)

I am praying constantly to God to help Japan. The earthquake and tsunami were so bad but I am now so worried about the serious news of the nuclear reactor. I hope that everything will end soon with the least damages.

Dear my beloved friend, please tell me how can help you and your great people. I am really sad because I'm just watching these homeless people and the devastating effects of the Tsunami on the news. My heart is with all of you.

Insha'allah, God will help you in this crisis.

I wish to you and to all of the friendly Japanese people safety, health and happiness.

Hope to see again.

Your supporting brother

Tariq



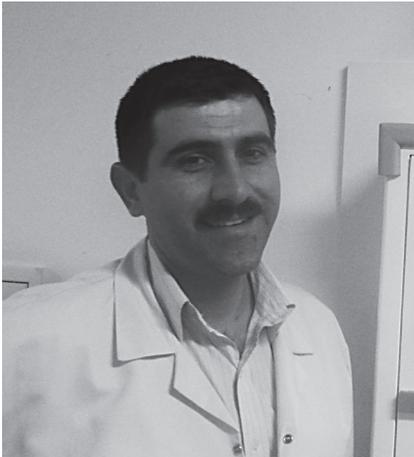
こんにちは！

地震と津波のニュースを聞きとても心配しています。皆さんとその御家族がどうか無事でありますように。また私の祈りが日本のすべての人々に届きますよう。そして犠牲になった方々にお悔やみ申し上げます。

地震と津波の被害もとても甚大なものでしたが、私は今、原発事故の方が気がかりでなりません。これらの問題が一刻も早く、また最小限の被害に抑えられ解決されることを願っています。

テレビを通じて、被災者の映像を見ているだけで、非常なもどかしさを感じています。

日本の愛すべき友人の皆さま、今我々にできることはなんのでしょうか？ どういう形で皆さんを支援する事ができるのでしょうか？



私達の心は皆さんと共にあることをどうか
忘れないでください。

Dr. ターリク・シュジャイリー
セントラル小児教育病院

Здра В СТ Вуйт е!

☆ アブー・サイド バグダード現地スタッフより

اسلام عيڤم باحي

اتمنى ان تكون قد وصلت بالسلامه لبيئتك واهلك وقت بتقديم واجبك تجاه شعبيك وان تكون الامور قد عادت الى بلدكم العزيز الذي طالما دعونا لكم بالخلاص من تلك النكبه الصعبه عليكم وهذه المحنه الشديده فانكم شعب صبور سوف تتجاوزو هذه المحنه بسلام وتعيدو بناء بلدكم العزيز علينا وعليكم وشكرا

アライクム サラーム

みなさんの御家族が無事でありますよう。

現在、被害に遭われた人々のために大変なミッションをなされていますね。あなたがたの偉大な国がかつてのように元通りになることを願っています。日本の人々は忍耐強い方達です。ですから、この困難をきっと乗り越えることができるでしょう。そしてあなた方にとっても我々にとっても偉大な国である日本を復興させることができるでしょう。

☆ Dr. ハサナイン・ハビーブ・ガーリー (バグダード小児福祉教育病院)

Hello all, how are you?

Sorry to hear about the earthquake in Japan...

We hope you all are well and in good health.

Hope that all injured people will get better soon.

Regards.

日本の震災のニュースを聞きお悔やみ申し上げます。

皆さんが御無事であることを祈っています。そしてすべて傷ついた人々が一刻も早く良くなるよう祈っています。

こんにちは！

☆ Dr. マーゼン・アルジャーディリー（バグダード小児福祉教育病院）

Dear Friends

I hope you are doing well, I didn't send any e-mail in the previous days knowing that you might be busy in more than one thing.

We never stop thinking of you but still helpless and don't know what to do, at least we have a feeling and in spite of unbelievable obstacles we are living with, we still feel guilty of not helping you in anyway.

Maybe wishing the peace for all is the best that we can give for the time being.

One suggestion; can you omit one month donation to our hospital and we will try to collect it from our friends and people to supply the children with drugs.

Waiting for your opinion

Best regards

皆さんが御無事であるよう祈っています。ここ数日は皆さんがとても忙しくしていると思いメールもお送りしませんでした。しかし皆さんの事をかた時も忘れたことはありません。我々は今皆さんのために何をすべきなのか。我々自身も大きな困難を向き合っていますが、皆さんに何の助け手を差し伸べないでいることにとっても心苦しさを覚えるのです。おそらく皆さんの平安のために祈るということが我々にできる最上のことかもしれませんが、一つの案として、1カ月分の我々の病院への寄付を見合わせる（地震による被災者へまわすために）というのはいかがでしょう。1カ月分の子ども達への薬品代は友人や我々自身でなんとか工面するようにしたいと思います。

お返事をお待ちしています。

沈む日本を愛せますか？ 内田 樹・高橋源一郎

Book

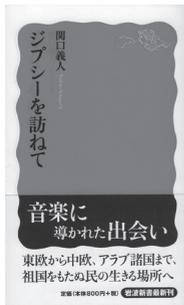


「沈む日本を愛せますか？」
著者：内田 樹・高橋源一郎
発行：ロッキング・オン
定価：1500 円＋税

内田樹と高橋源一郎が日本政治を語る、季刊総合誌『SIGHT』に連載中の対談を、紙面未掲載部分も加えて再構成して収録。また、新たに語りおろした「総括対談―沈む日本を愛するために」も追加。「右肩下がりの時代」を生き抜くための提言集。

ジプシーを訪ねて 関口義人

Book

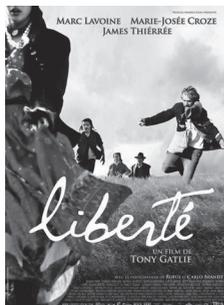


「ジプシーを訪ねて」(岩波新書)
著者：関口義人
発行：岩波書店
定価：800 円＋税

国をもたぬジプシーたちは、この21世紀の世界をどう生き抜いていくのか。ジプシー音楽の魅力に導かれた著者が、さまざまな困難にあいながらも、歴史あるジプシー集落から難民キャンプまで、バルカン〜中欧〜中東諸国へと、ジプシーたちを訪ね歩いた10年の経験をまとめた。

Liberté (自由) トニー・ガトリフ

Movie



「Liberté (自由)」
監督：トニー・ガトリフ
2009年/フランス/105分/カラー
<http://www.ugcdistribution.fr/liberte/>

『ラッチョ・ドルーム』をはじめジプシー映画を撮りつづけているトニー・ガトリフの最新作。第二次世界大戦下のナチスと仏ヴィシー政権のロマ(ジプシー)迫害をとりあげ、ブドウ収穫の仕事を求めてやってきたロマの団がゲシュタポに捕まり収容所に送られる悲劇を描く。(日本未公開)

アジトポップ

リアピス・トルベツコイ



「アジトポップ」
リアピス・トルベツコイ
発売：オフィス・サンビーニャ
定価：2835 円（税込）

リアピス・トルベツコイは、ベラルーシが旧ソ連から独立した1990年に首都ミンスクで結成されたロック・バンド。スカやハードロック、パンク、ヒップポップなどをブレンドした、非常にポップで親しみやすいサウンドを聴かせてくれる。本作は彼らの代表作を集めたベスト盤。

CD

ラブソディア

コパチンスカヤ



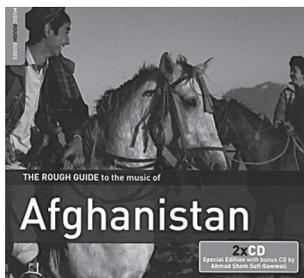
「ラブソディア」
パトリシア・コパチンスカヤ
発売：エイベックス・マーケティング
定価：2800 円（税込）

パトリシア・コパチンスカヤは、モルドヴァ生まれのヴァイオリン奏者。本作は、ツインパロン奏者の父と、フィドル奏者の母との共演アルバム。彼女自身のアイデンティティに関わる中東欧の匂いを感じさせてくれる民謡から現代作品まで、情熱的な演奏を聴かせてくれる。

CD

ザ・ラフ・ガイド・トゥ・アフガニスタン

The Rough Guide to Afghanistan



「ザ・ラフ・ガイド・トゥ・アフガニスタン」
発売：ライス・レコード
定価：2310 円（税込）

本作は、ポピュラー音楽から、地方の民俗音楽、古典音楽までを集めた、アフガニスタン音楽をコンパクトに紹介する世界初の編集アルバム。ボーンナスCDには、アフガニスタンで最も尊敬を集めている「アフマド・シヤム・スーフィー・カッワリー・グループ」の未発表アルバムを収録。

CD

Information

日本チェルノブイリ連帯基金（JCF）活動紹介

日本チェルノブイリ連帯基金（JCF）は1991年1月に設立されました。1986年4月26日に起きたチェルノブイリ原子力発電所の爆発事故の放射能被災地へ、主に医療を中心として支援活動を展開しています。

支援開始当初のベラルーシは、深刻な経済状況で、白血病など病気の子ども達は、十分に治療を受けることができませんでした。衛生管理もできなかったために、多くの子ども達は感染症などで亡くなっていました。JCFは、現地の医師らと話し合いながらプロジェクトを組み、信州大学などの医療従事者と共に着実な支援活動を続けてきました。

そして2004年、活動の支援先はイラクへも広げられました。イラクでは湾岸戦争以後に白血病が急増しています。長期にわたった経済制裁後、新たに起きた戦争で極端に物資が不足、子ども達の治療もままならず、多くのいのちが失われています。



日本イラク医療支援ネットワーク（JIM-NET）

イラクにおける小児がん（おもに白血病）医療支援のためのネットワーク。医療支援を行っているNGOや関心のある医師たちが、専門性を持ち、過不足のない支援を（イラクの人々が自分たちできちんとした治療ができるようになるまで）継続的に続けることを目指して立ち上げた。JCFも構成団体の一員。

website <http://www.jim-net.net/>

◆ JCF 会費振込口座

| | |
|-------------|---------------|
| 正会員年会費（1口） | 10,000円 |
| 賛助会員年会費（1口） | 3,000円 |
| 郵便振替口座番号 | 00560-5-43020 |
| 加入者名 | 日本チェルノブイリ連帯基金 |

◆ JCF / イラク支援振込口座

血液成分分析機購入、医師招聘研修、薬品購入

| | |
|----------|---------------|
| 郵便振替口座番号 | 00520-0-81078 |
| 加入者名 | JCF / イラク支援 |



第 87 号

発行日 2011年4月26日

発行人 鎌田 實

発行所

日本チェルノブイリ連帯基金

イラスト題字 貝原 浩

イラスト 樺野ひかり

小林裕子

スタッフ 神谷さだ子

布山みな子

宮ノ尾秀彦

協力 寺島仁美

JIM-NET

風樹光

印刷 電算印刷

■編集後記

『ヨコハマ買い出し紀行』というコミックがある。震災の後、この物語がしきりに頭をよぎる。物語の舞台は、「お祭りのようだった世の中」が終わり、かつて『東の都』と呼ばれた場所が、今は海底に沈んでいる近未来の日本である。しかしその『日本』に悲壮感はなく、物資の欠乏した世の中で、人々はむしろ平穏に満ちた日々を暮らしている。何があったのか、なぜこうなったのか、物語の謎は最後まで解き明かされず、どう解釈するかは読者に任されている。17年も前に書かれた作品なのに、今の解釈を私に与えてくれる。3.11を経験した私達は新しい物語を紡ぎ出すことができるだろうか？ (布山)

販売物紹介

Book

・「チェルノブイリからの伝言」

JCF 編 (オフィスエム) 1200 円

CD

・「小室等／ベラルーシの少女」

(8cm シングル盤) 1000 円

◆がんばらないレーベルCD

・「ヴラダン・コチ／ふるさと」

2500 円

・「坂田明／ひまわり」

2500 円

・「坂田明／おむすび」

2500 円

ドクターかまちゃんの寒天ゼリー

1000 円

* 販売物の詳細は事務局にお問い合わせ下さい。

Grand Zero 読者の皆さま

東日本大震災、福島原発事故で被災された皆さまに心よりお見舞い申し上げます。

今号は、3月26日発行予定で原稿を頂き、編集を進めていました。3月11日の東日本大震災、福島原発事故のために発行が遅れてしまいましたこととお詫びいたします。今回の原発事故について、お伝えしなければいけないことはたくさんありながら、事務局の力及ばず、本誌が十分な内容にならなかったことを申し訳なく思います。皆さまからのご寄付や支援物資が、被災された方の力になるよう、努力してまいります。今後とも、応援をどうぞよろしくお願い致します。

●特定非営利活動法人

日本チェルノブイリ連帯基金 (JCF)

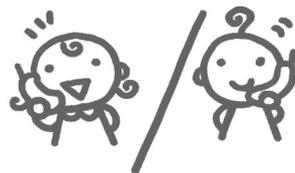
〒390-0303

長野県松本市浅間温泉 2-12-12

TEL 0263-46-4218 FAX 0263-46-6229

E-mail asama@jcf.ne.jp

Website http://jcf.ne.jp





脳腫瘍
イラフちゃん 8歳 バクーバー出身

この絵は、イラフのお父さんが描いた絵。
2008年、アンマンで無事治療を終え、
イラクに帰ろうとしたけれど、
お金が尽きてしまった。
そこで、お父さんに働いてもらおうことになり、
イラフの物語に絵をつけて
絵本にする計画が立ち上がった。
この絵はイラフを病院に連れて行くところだ。
余りに絵がへたくそだったので、
この計画は流れてしまった。
そんな父と子が、先ほどアルビルにやってきた。
3年ぶりの再会に感動。
すっかり、元気になっていた。